

日本人 EFL(英語第 2 言語学習者)への

効果的な前置詞教授法:

——前置詞 With を例にして¹——

花崎 美紀 (信州大学 人文学部)

花崎 一夫 (信州大学 全学教育機構)

1. 序 : 本稿の目的

日本人英語学習者が英語を学習する際、修得が困難に感じる事項の一つが前置詞である。その理由として、前置詞は沢山の意味があり、その意味を「覚える」のに苦労するということが挙げられるであろう。本稿が扱う *with* も学習者が修得に困難を覚える前置詞の一例である。たとえば、日本で最も使われている英英辞書の一つである Cobuild は *with* の意味として 21 個の意味を挙げている。さらにもう一つの理由として、どの意味なのか判別できない用法があるということも挙げられよう。

(1) Cobuild による *with* の意味の一部

a. they are together in a place. *With her was her son.*

b. you oppose them *He was in an argument with his landlord.*

(2) About a thousand students fought with police. (COCA²)

(2)の *with* は(1a)の意味にも (警察と一緒に戦った)、(1b)の意味にも (警察に対抗して戦った) の意味にも取れるため、学習者は意味の特定に悩むことになる。さらに、*with* の学習が困難な 3 つめの理由として、その多義に共通性が見いだせないということが挙げられるであろう。以下は、研究社英和辞典による意味の一部であるが、

(3) 研究社英和辞典による *with* の意味の一部

a. <原因> *shiver with fear*

b. <譲歩> *With all her merits, she was not proud.*

¹ 本稿は、Hanazaki, M and K.Hanazaki (2016)として口頭発表したものを、加筆修正したものである。

² COCA とは、Corpus of Contemporary American English の略で、1990-2015 年に使われた話し言葉や書き言葉を 5.2 億語集めた世界最大級の英語コーパスである。

原因と譲歩は、意味が正反対であり、これらの意味の共通性を学習者が感じとることは難しい。

よって本稿では以下の課題について検討をするものである。

(4) 本稿の目的

- a. with の意味を明らかにする
- b. a で求めた理論を教授法に応用する

2. 前置詞 With に関する先行研究概観

前置詞 with に関する先行研究は多くあるが、それらは大きく3つの流れに大別することができよう。一つは多義をみとめそれらの意味を列挙するもの、一つは単義論に立つもの、あるいはそのコアミーニングを議論するもの、そして最後は、その史的な発展について議論するものである。

2.1. 先行研究第一の潮流：意味の列挙

先行研究だけでなく、多くの辞書および多くの現行の教科書はこの潮流に含まれよう。先述の Cobuild が with に 21 個の意味を認め列挙しているのは、この最たる例として挙げられるであろうし、日本の検定教科書は、新出単語にはその訳を注に列挙していることが多い。先行研究の中では、安藤（2005）などがこの類に含まれるといえよう。

しかし、意味を列挙することは、学習者にとっては、意味を記憶するという負荷がかかることであり、効果的な教授法とはいえないであろう。

2.2. 先行研究第二の潮流：単義論もしくはコアミーニングを求めるもの

この潮流に含まれるほとんどの研究は、with の意味は「同伴」(Accompaniment) であると議論しており、その一例として、Dirven (1993,1995), 小西(1955), Langacker (1991), Lyons (1977), 加藤&花崎 (2006) などがあげられるであろう³。

COCA などによる使用例を採取しても、ほとんどの例は、(1a)のような例であり、同伴が中心義であることは間違いないであろう。しかしながら、序節で概観した、一見すると共通な意味を見出しにくい(3a)(3b)のような例、さらには、(5)のように、with の意味が同伴であるとする説明を要する用法も沢山ある。

³ ほかに、with には意味がないとする河本 (2002) や、「ある」であるとする加藤(2006)などもこの中に含まれよう。

(5) Have a feeling toward a person

He was still angry with her.

(5)は、with の意味が「同伴」であるとするなら、「彼女とともに怒っている」という意味になるわけであるが、どうしてそのような意味にならないのかの説明が必要である。すなわち、一見すると無関係に見える意味用法を説明するメカニズムの解明が必要であるといえよう。

2.3. 先行研究第三の潮流：With の歴史的発達についての研究

この流れの代表的なものとして、和田(1989)、大森(1997)、Takamatsu (2006)などを挙げることができるであろう。古英語時代においては mid という〈同伴〉を表す語と、wiþ という〈相対する〉という語と、〈対抗する〉という意味を表す ongean の 3 語が存在していた。そしてその 3 語は、1100 年～1200 年ごろに、mid が消滅し、mid の意味は wiþ が引き継ぎ、wiþ の意味は against の語源である ongean が引き継ぐという意味変化が起こった。高松(2006)は、この意味のやり取りを、以下の図 1 のようにまとめている。

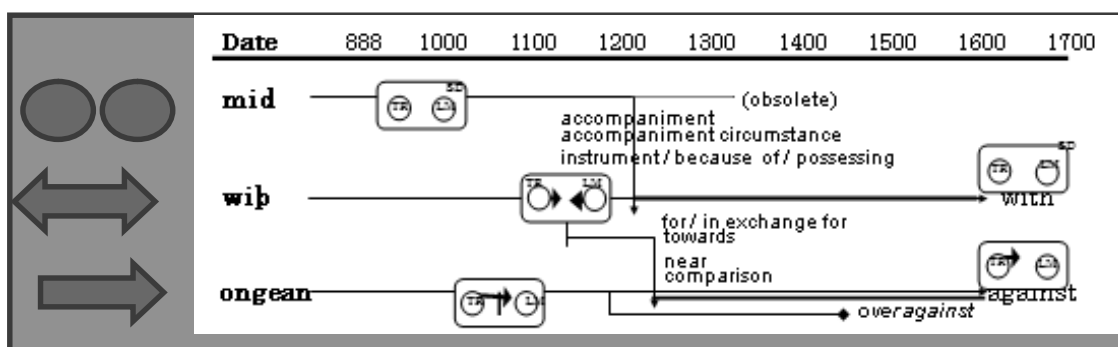


図 1 mid, wiþ, ongean の意味の変遷 (高松 2006)

このような流れは、(2)で指摘したような問題、すなわち、どうして、with には、同伴 (1a) の意味と、対立(1b)の意味があるのかを説明しうる。しかしながら、どうして、1100 年から 1200 年ごろにこのような意味変遷が行ったのか、つまり、どうして、with がこのような多義を担うことになったのかについては、完全に説明できているとはいえない。

3. 前置詞 With の意味の考察

そこで本稿では、COCA (Corpus of Contemporary American English)、NOW⁴ (News on Web)

⁴ NOW コーパスとは、News on Web コーパスの略で、2010 年以降の、英語を話す 20 カ国のニュース英語をコーパス化したものである。このコーパスは逐次アップデートされるのが特徴の一つであり、毎日収録語数は増え続けている。2016 年 10 月現在 28 億語をデータベース化した世界最大のコーパスである。

コーパス等を使い、実際に、現代英語において、with がどのように使われているかのデータを収集し、その収集したデータを Tyler and Evans (2003)がいうところの Contextual information (文中の語句によって産出される意味)を考慮し、意味用法を分類し、そのコアミーンングと多義ができるメカニズムを検証した。

Contextual Information を考慮した考察とは、すなわち、たとえば(6)において、over は、「上を移動する」という意味と (6a)、「上で静止する」という意味 (6b) を認めることが Lakoff (1987) や Brugman (1981, 1985) 以来、よく取られる手法であるが、

(6) a. The plane flew over the city.

b. Hang the painting over the fireplace. (Lakoff 1987 : 419)

Tyler and Evans(2003)は、これらの2つの「意味」は、fly と hang の意味に帰せられるべきものであり、over の2つの意味に帰せられるべきではないとする考えである。

3.1. With のデータ収集と、意味用法の分類

1990-2015年までのアメリカ英語をデータベース化した(5.2億語)COCAと、2010年から現在までの世界20か国のニュースをデータベース化した(28億語)NOWコーパスからwithが使われている用例をデータベース化し、それらの意味を、上述の contextual information に考慮しながら分類したところ、以下の5つの意味用法に分けることができた。

(7) With の5つの意味用法

A. 同伴 Melissa played with him.

B. 手段 She will write with a pen.

C. 同時性 Wisdom comes with age.

D. 原因・理由 In bed with a cold.

E. 譲歩 With all these changes, one thing is certain.

(すべての例は COCA より)

3.2. With の意味用法と似通った意味をもつ語や用法：As, And、2文並列

(7)において、with の意味を5つに分類することができたが、英語の単語を見回したとき、同じ意味用法は、as も and も持っていることに気が付く。

表 1. With と As と And の平行性

	with	As	and
同伴	He is living <i>with</i> his aunt.	He is as tall <i>as</i> you.	you <i>and</i> I
同時性	Wisdom comes <i>with</i> age.	He came up to me <i>as</i> I was talking	We walked <i>and</i> talked
理由	shiver <i>with</i> fear	Clever <i>as</i> he was, he succeeded.	He was very tired <i>and</i> went to bed.
譲歩	<i>With</i> all his merits, she was not proud.	Young <i>as</i> he was, he passed with flying colors.	I told him to come, <i>and</i> he didn't

さらに興味深いことに、表 1 の例文から、as / and を除き、2 文を並列しても同じ意味に解釈される。⁵

表 2. 2 文並列の平行性

	表 1 から as を抜いた文	表 1 から and を抜いた文
同伴	He is tall. You are tall.	You. I
同時性	He came up to me. I was talking	We walked. We talked
理由	He was clever. He succeeded.	He was very tired. He went to bed.
譲歩	He was young. He passed with flying colors.	I told him to come. He didn't come.

⁵ as と and は接続詞であるため、それらを削除して 2 文を並列することができるが、with は前置詞であるため、それを削除して 2 文を並列することができない。

これらの表1、表2をみると、(7)の5用法は、withに特有なものであるとはいいがたい。その語に特有であると議論するということは、表2の2文並列の「。」(ピリオド)にもその5用法を認めることにつながる。

3.3. Withの多義

では、どうして、これらの多くの語や、二文並列が同じ意味用法に解釈されうるのか。それについては、Michotte (1963)の「因果関係知覚」によって説明ができるであろう。Michotteはスクリーンに映し出される2つのボールのアニメーションを自在に動かし、因果性知覚を生じる条件について調べている。人は2つのボールが衝突する事象を提示されると、一つのボールがもう一方を動かす「原因」となったと報告する。(もちろんこれらのボールはアニメーションであり、プログラムによって動いているのにすぎない。)しかし、静止していたボールが、接触後、動き始めるまでに遅延があったり、接触前に動き始めたりすると、因果性は認められなかった。2つのボール(事象)が同時に行為を始める(あるいは終わる)際には、人間は、その2事象間に因果関係を認める傾向があるというのだ。つまり、<同時><理由>の2つの意味用法は、家族的類似性によって生じた意味と言うよりはむしろ、同時に2つの事態が起こったときに、会話参加者が意味読み込み(推論)によって解釈した意味用法であり、それが、pragmatic strengthening(語用論的強化)(cf. Traugott (1988))によって、意味として固定したものと考えることができるというのが、本稿の主張である。

よって、本稿は、(4)の目的をたてていたわけであるが、

(4) 本稿の目的

- a. withの意味を明らかにする
- b. aで求めた理論を教授法に応用する

それに関して、

- (4a') withの中心的意味は「同伴」であり、2つの事物あるいはイベントが並列されることにより、<手段><原因><同時性><譲歩>などの意味用法に解釈される

という結論が得られた。

4. 3 節の議論を活かした、前置詞 With の効果的な教育法

本稿は上述の通り、(4)にあげる二つの目的を遂行するものである。本節では、3 節までの議論を教授法に応用し、効果的な前置詞の教授法について考察し、以下の2点を主張する。

- (8) 前置詞の効果的な教授法について
 - a. 従来行われている、用法列挙+エクササイズのような提示の仕方ではなく、その文法事項あるいは語彙のモチベーション（動機、理由）を示すような教授法を行うべきである
 - b. 学習者が必要に応じて学習できるような、e-Learning のモジュール教材の提示が効果的である。

4.1. 脱「用法列挙+エクササイズ」、モチベーションを教える教授法

2 節で見たとおり、従来の教科書は、新出単語や文法事項に対して用法を列挙し、そのあと、その項目についてエクササイズを行う形がほとんどである。しかし、これは、学習者に記憶させることが主たる狙いとなり、学習者に「理解」させることにはつながりにくい。そこで、本稿は、前置詞のような一般的には「機能語」と呼ばれるものについても、「理解」させる授業展開を提唱するものである。すなわち、ただ単に用法を列挙するだけでなく、どうしてその文法事項等が存在するのか、そのモチベーション（理由、動機）を説明することが有効であるという考えである。

これは、筆者らの一連の研究結果に基づいた教授法を援用したものである。

たとえば、Hanazaki, Fujiwara, Kikuchi, Hanazaki (2016, in press)および藤原、菊池、花崎、花崎（当号、別稿）では使役動詞を取り上げ、一般的には *make, have, get, let* は、*make* が主語の使役力が最も強く、*let* が最も弱い (*He made her go / He let her go*) と説明されているが、そうではなく、*make* は概念化者が、主語が主な原因であると認めているとき、*let* は概念化者が、目的語が主な原因であると認めているときに使うという棲み分けを説明し、このような棲み分けを説明することが、学習者の理解を促すということを分散分析などを使って立証した。

さらには、Hanazaki and Hanazaki (2015)では、前置詞 *to* について同様の教材を作成し、学習者の定着度について、従来型の教授法と比較し、結果として、モチベーション（理由・動機）を教える教育法が前置詞の学習においても有効であることを示すことに成功した。

本稿では、筆者らの先行研究を援用し、同様に前置詞 *with* においても、モチベーション（理由・動機）を教える教授法を提唱するものである。

4.2. モジュール化された教材

4.1.で述べたような教材を作る際、少しでも、学習者にとって学習が容易になる仕組みを考えなくてはならない。そこで、一連の本研究は、英文法の学習を容易にする仕組みとして、教材をモジュールスタイルとして作成し、それらの教材を、信州大学のイーラーニングシステムのプラットフォームである e-Alps にアップロードしており、我々の英語の授業を受講している学生であれば、自由にダウンロードして自学自習用として活用できるようになっている。⁶ また、モジュールごと、すなわち文法項目ごとに教材が提供されているということは、学生は必要な教材を必要な時に選択して学習することが可能になるということも意味している。⁷

以下の図2は、英文法の項目が掲載されているページを含む e-Alps の抜粋である。我々は現在でも英文法のモジュール型教材の作成を継続しており、少しずつ扱う文法項目を増やしているところである。



図2：モジュール教材のトップページ

4.3. その他の工夫

その他の工夫として、以下の2点を挙げることができる。すなわち、3) 実際の運用を想定した英語の例文を選択し、4) 学習者のモチベーション向上のために、プレテストとポストテストを、モジュール毎に作成しているという点である。

言語学の中でも生成文法分野では、そこで扱う例文は、言語学者が作り出したものが多く、場合によっては非文を取り上げることで文法的な文との差異を説明することもあり、

⁶ 現在のところ我々が提供している教材は、基本的には我々の英語授業の受講者が自由に閲覧できるようになっている。今後は、信州大学の学生全員が自由に閲覧できるようにしていくことを検討中である。

⁷ モジュール教材の有効性については、花崎、花崎、藤原 (2015) にまとめた。

実際の言語運用とは乖離している場合が散見されるのであるが、我々が援用している認知言語学の分野では、扱う例文をなるべく実際に使われている英語から引用することが多い。そこで我々もこの点に留意し、取り扱う例文を COCA(Corpus of Contemporary American English)や、実際に話されている言語データをコーパス化した Bank of English をもとに編纂されている Cobuild などから抜粋し、なるべく実際に運用されている生きた英語を取り上げるようにしている。こうすることで、学習者が実用的な英語を習得し、運用することにもつながると確信している。

また、4つめの特徴としてあげられるのが、それぞれのモジュール型教材には、それに対応する学習前テストと学習後テストが用意されているということである。学習前テストに取り組むことで、学習者は、当該の文法事項をどの程度理解しているのかを事前に知ることができ、学習の際には、自分が理解していない部分を重点的に効率よく学ぶことが可能になり、このことが学習者の学習の動機付けにつながる。また、学習後テストを用意することで、学習者はそのテストに向けて教材の学習に集中することが期待でき、その結果、当該の文法事項の確実な習得に寄与することにもなる。我々の担当する授業では、学習後テストを成績評価の一部に加味することで学習者の理解度を測定するとともに、学生の学習意欲の維持向上に努めているところである。

4.4.実際の With の教材の一部

次ページに示すのが、with のモジュール教材の一部である。⁸

⁸ 全体の教材は、信州大学の e ラーニングシステムのプラットフォームである、e-Alps にアップロードされている。

様々なWithの用法 <一致>

一文ずつ詳しく見ていこう！

I am with you in what you say.
私はあなたの言うことに同意します。(意見の一致)

あなたの発言という場に「私」と「あなた」がともにいるということ

↓

「一致」の用法が派生する

Withの意味は<同伴>

With

→

文脈

手段

様態

原因

He has been in bed with a cold for a week.
(彼は一週間風邪とっしょにベッドにいた)

風邪が原因で寝込むというのは文脈からわかること。
このような文脈でwithが使われているうちに<原因>の用法が確立した。

Withの意味は<同伴>

証拠としてさらに

With all her talent

→

If she has talent

Though she had talent

With all her talent, she ought to get a job.
(彼が何と才能があれば、仕事に就けるはずだ。)

With all her talent, she could not get a job.
(彼女は才能がありながら仕事に就けなかった。)

同じ表現でも文脈によって異なる意味を表します！
Withの「意味」は文脈から生じています。これらをwithの用法と呼ぶ所以ですね。

Pre-test

前編テスト 単語テスト

- 1 大仲の店西に入ると、何時間も待たされた。
- 2 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 3 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 4 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 5 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 6 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 7 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 8 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 9 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 10 彼は、その場に倒れ込んでしまった。

Post-test

前編テスト 単語テスト

- 1 大仲の店西に入ると、何時間も待たされた。
- 2 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 3 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 4 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 5 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 6 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 7 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 8 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 9 彼は、その場に倒れ込んでしまった。
- 10 彼は、その場に倒れ込んでしまった。

図3：With教材の一部

4. 結論

本稿では、(4)の2点を議論することを目的としていた。すなわち、1つ目は、認知言語学の知見を活用した前置詞 with の意味論についてであり、2つ目は、その主張に基づく、前置詞 with の効果的な教材の提唱である。

第2節では、多義である with の中心的意味は「同伴」であり、2つの事物あるいはイベントが並列されることにより、<手段><原因><同時性><譲歩>などの意味用法に解釈されるということを中心とした。

さらに3節では、第2節の考え方をベースに作成した with のモジュール型教材を紹介した。従来、多くの教科書が採用する、用法列挙とエクササイズという提示の仕方ではなく、その文法事項のモチベーション（理由、動機）、with の場合でいうなら、その多義の理由を説明するようなモジュール型教材を提示した。こうすることで、英語学習者の負担の軽減にもつながると確信している。

今後はさらに取り扱う文法項目を、機能語においては前置詞だけでなく、接続詞にまで範囲を拡大し、英語学習者の英語力向上につなげて行きたい。

32

参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 東京：開拓社。
- Brugman, C. (1981) *Story of Over*. master thesis, UC-Berkeley. Berkeley, California.
- (1985) *The Story of Over: Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon* (Outstanding Dissertations in Linguistics). London: Taylor & Francis.
- Dirven, R. (1993) "Dividing up physical and mental space into conceptual categories by means of English prepositions" in C.Zelinsky-Wibbelt ed. *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language*. Berlin: Mouton de Gruyter. pp. 73-97.
- (1995) "The construal of cause: The case of cause prepositions" in J. R. Taylor and R.W. KacLaury eds. *Language and the Cognitive Construal of the World*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 花崎一夫、花崎美紀、藤原隆史 (2015) 「英語教育に活用するモジュール型教材の可能性：英文法の学習を中心にして」『JeLA』 18, pp. 95-104.
- Hanazaki, M., T. Fujiwara, S. Kikuchi, and K. Hanazaki (2016) "Correlation between Logical Thinking, English Ability and Pedagogy: Practicing Government Course Guideline" oral presentation made at MICELT (International Conference on English Learning and Teaching), Malaysia, March, 30th.
- (in press) "Correlation between Logical Thinking, English Ability and Pedagogy: Practicing Government Course Guideline" *JSSH, Journal of Social Sciences and Humanities*.
- Hanazaki, M. and K. Hanazaki (2015) "Teaching Prepositions to Japanese EFL College Students; Bridging Theory and Practice", *IJLEAL* (International Journal of Language Education and Applied Linguistics) 2015, Vol3, pp.1-10.
- (2016) "An Effective Way of Teaching Prepositions to Japanese EFL Learners: A Case Study with *With*" Oral Presentation Made at MICOLLAC, International Conference on Languages, Literature and Culture, Penang, Malaysia, August 16th.
- 加藤 鉦三 (2006) 「デ格とニ格の名詞句が担う意味役割」 *Morphology and Lexicon Forum 2006特別セッション：「意味役割理論の新展開」* 2006年5月14日。
- 加藤鉦三、花崎美紀 (2006) 「With の意味論」口頭発表、日本近代英語協会。
- 河本 誠 (2002) 「前置詞 with の同伴性について」『岡山理科大学紀要』第 37 号. pp. 19-29.
- 小西 友七 (1955) 『前置詞 (下)』 東京：研究社。
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. (1991) *Concept, Image and Symbol*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lyons, J. (1977) *Semantics 2*. Cambridge: Cambridge U.P.

- Michotte, A. (1963 [1941]) *The Perception of Causality*. New York: Basic Books. Translation by T.R. and E. Miles.
- 大森 裕實 (1997) 「OE・MEにおける前置詞 with/mid/against の分布に関する語彙意味論的分析」 『愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編』 pp.1-24.
- Takamatsu, Y. (2006) “The Preposition *With* from the Semantic Perspective”. MA thesis, Shinshu University.
- Traugott, E. C. (1988) “Pragmatic Strengthening and Grammaticalization” *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 406-416.
- Tyler, A. and V. Evans (2003). *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge U. P.
- 和田 葉子 (1989) 「前置詞 mid 消失についての一考察」 『英文学論集』 関西大学英文学会 pp. 118-123.